様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月　 ９ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２１５５

研究課題名（和文）東アジア哲学の共通基盤としての数理と論理

研究課題名（英文）Logic and mathematics in East Asian philosophy

研究代表者
朝倉　友海（Asakura, Tomomi）

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：３０５７２２２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究「東アジア哲学の共通基盤としての数理と論理」は、京都学派および現代新儒家の哲学において数理と論理をめぐる思索が果たしてきた役割の解明に取り組み、いくつかの成果を得た。西田幾多郎および牟宗三によって代表される両学派の哲学は、たとえ宗教的直観に言及していたとしても、あくまで論理に依拠する性格をもつ点に共通性をもつこと、および、東アジア哲学が全般として、大乗仏教を援用しつつも近代哲学の枠組みを拡張する意図をもって、論理および論理の考察に取り組む性格をもつことが、本研究によって明確化された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、第一に、数理・論理的な観点からの東アジア哲学の意義を明らかにした点に、第二に、大陸哲学と分析哲学との分断のもとでの従来の東アジア哲学研究に再考を促す点に、学術的意義のみならず社会的意義をもつ。東アジア哲学は従来、宗教的直観との関係で理解されることが多く、この点に疑問をもつものは東アジア哲学を疎遠に感じる傾向があったが、これは数理的・論理的な普遍性に定位するという東アジア哲学の性格を見誤ったものであり、本研究はこの点で従来の理解を修正することに貢献した。

研究成果の概要（英文）：The research project Logic and mathematics in East Asian philosophy has explored several aspects of the theoretical roles that mathematical and logical investigation played in the Kyoto School and New Confucianism. This research project has clarified the following two points. First, these two schools, represented by Nishida Kitaro and Mou Zongsan, essentially rely on logical speculation instead of religious intuition. Second, they have intention to further develop the scheme of modern Western philosophy in terms of mathematical and logical speculation by means of exploiting Mahayana Buddhism.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：東アジア哲学　論理　数理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 「東アジア哲学」という語は多義的に用いられるが、有力な用法として、西田幾多郎を中心とする京都学派と中国語圏における熊十力や牟宗三を代表とする現代新儒家に始まる哲学潮流を指す用法がある。内容的には、西洋哲学と仏教・儒教などの東アジア思想の影響をともに受けた哲学であるが、この領域をめぐり国内のみならず英語圏を中心に研究叢書や学術誌の刊行が相次いでおり、両学派がもつ多くの共通点が次第に明らかにされつつある。本研究もこの流れの中にある。

(2) これまでの研究で両学派の共通基盤としての「無の存在論」（場所的論理、仏教的存在論）の解明が進展してくるとともに、浮かび上がってきた難点がある。「東アジア哲学」において数理と論理をめぐる考察の役割をどう評価するかということである。よく知られているように、西田幾多郎や牟宗三が取り組んだ「無の存在論」はともに数理と論理をめぐる考察を伴っているが、従来の研究では、大乗仏教の影響を受けた哲学的思索という側面と、数理と論理の考察を不可欠のものとする特徴との関係が、うまく説明されてこなかった。

(3) 京都学派を対象とした研究に限って言えば、西田や田辺元の数理哲学に特化した研究は続けられてきた。だが従来そこでは、「東アジア哲学」の共通基盤に対しての視野を欠くという制約があり、このことによる研究の滞りが見られた。同様に、分析哲学の観点からの東アジア思想研究もまた、「無の存在論」を「東アジア哲学」の共通基盤として見るという上記の研究動向とは無関係になされる傾向が、少なくとも従来は強く見られた。

２．研究の目的

(1) 本研究は、従来の京都学派・現代新儒家の比較・統合の試みの盲点となっていた数理と論理の考察を通して「東アジア哲学」の共通基盤を明らかにすることを目的としている。そのため当初の計画として、京都学派と新儒家における数理と論理をめぐる思想がその基礎としている「関数論的理解」の解明に取り掛かる。この基盤の上に、仏教思想との関係において展開される論理や存在をめぐる思索が展開されているという見通しのもとに、後者の解明にまで進むのが本研究の計画である。

(2) 関数論が二〇世紀前半の哲学においてある種の共通項であることは、フレーゲやコーエンなど多くの哲学者が「関数」概念を援用したことに示されているだけでなく、カッシーラーによる「実体」概念から「関数」概念への移行という哲学史的理解などをめぐって多くの論者によって議論されてきた。当然ながら東アジア哲学もまたその影響下にあるが、まずこのことから明確化していく必要がある。従来の研究では関数論が一般に「東アジア哲学」の共通了解とは考えられてこなかったが、西田や田辺はもちろんのこと、牟宗三もまた「関数」概念をいたるところで援用しており、本研究はこの点に着目する。

(3) 西田は自覚の立場以来の中心概念である「映す」ことを「函数的関係」として定式化しようとし、場所的論理の原理を数理の立場から説明しようとした。田辺は「ライプニッツ的実変数函数」に基礎を置く近代哲学を「リーマン的複素函数」に立脚するものへと前進させるという発想により、主体の論理を定式化しようとした。牟宗三は、教相判釈の問題を無限級数の収束と発散を通して論じただけでなく、「即」をめぐる解釈において「関数」概念を援用しており、関数論的な理解の上に八不を「不完全記号」によって解釈するなど空観（般若、空の立場）を意味の次元（意義法）との関係で説明した。ここには、西田やとりわけ山内得立による意味の次元への着目などと共通する議論があり、こうした共通性の解明に本研究は取り組む。

３．研究の方法

(1) 京都学派と新儒家における数理と論理をめぐる思想を統一的に把握し、近代哲学との関係において展開される関数論的理解の意義を明確化するために、本研究ではまず、西田・田辺・牟宗三に共通してみられる関数論を比較・総合しつつ整理する作業を行う。ただその際に、彼らが依拠した数理的・論理的理解にとどまっていては東アジア哲学の共通基盤が見えてこない恐れがあり、この点が従来の研究の難点でもあった。そのため、その後の理論的発展を視野に入れて以上の作業を行わねばならない。具体的に挙げるならば、田辺は複素関数論に関してワイエルシュトラスによる解析接続の理論を多く援用したが、その後の数理哲学の展開を考慮して、例えば層の理論など田辺が援用することができなかった理論的発展を視野に入れて、理論的整理を進める。

(2) 以上のような関数論的理解を対象とした作業の上で、あるいはそれと並行して、関数への着目がいかに仏教的思惟との結びついているかを、つまり、いかに「無の存在論」が展開されていることを明らかにするのだが、これは主として、山内得立と牟宗三が「意味」の次元へと着目した点を取り上げて、その理論的内実を比較・総合することによって行う。この作業においてもまた、論理や言語をめぐって京都学派や新儒家の域を超えた知見を導入する必要があり、具体的には、分析哲学によって推し進められた言語と存在をめぐる考察を参照にして解明を進める。

(3) 本研究は比較哲学的な手法を用いるものの、東アジア哲学の理解に分析哲学と大陸哲学との架橋という新たな論点を導入する。数理や論理をめぐる最新の知見を取り入れることと併せて、分析哲学の知見を取り入れる準備も必要であり、本格的に研究成果を出せるようになるまで準備期間を長く取る計画となっている。様々な分野に渉るこれまでの学術的成果を消化していくにあたり必要となる資料収集は今後の研究の進展を大きく左右するため、初年度のうちにできるだけ進めるが、二年度目以降も継続的に行わねばならない。資料収集だけでなく、関連する諸分野の研究者との学術的交流もまた必須のものとなる。国内外を問わず様々な領域の研究者たちと研究交流を行うことで、東アジア哲学の共通基盤としての数理と論理の理解を進める。

４．研究成果

(1) 本研究を通して判明した最大の論点は、京都学派と新儒家の理解をめぐっては第二次大戦後の論理学および分析哲学の発展から切り離されたことによる理論的制約が大きいということである。京都学派や新儒家の流れにある思想家、ならびにそれらを対象とした二次研究をめぐって、第二次大戦後の論理学および分析哲学の発展から切り離されたことによる理論的制約を具体的に指摘する作業を本研究では進め、それにより従来の二次研究とは異なる観点から、西田や牟宗三が「論理」に終始こだわったことの理由を明らかにすることができた。この点で、いくつかの成果の公刊に至った（「東アジア哲学の理念と牟宗三」および「東アジア哲学とは何か、そして何であるべきか」）。

(2) 本研究における理論的整理および比較思想的作業を通して、学術的な成果がいくつか得られた。その中で重要なものとしてまず挙げられるべきは、田辺の関数論的理解をめぐる理論的整理である。これは学会発表を行った上で内容を公刊した（「田辺元の複素関数論」）。また、意味の次元をめぐる東アジア哲学の理論的整理の一環として、山内得立が行った議論が牟宗三の議論と重なることを示した。この成果は、台湾で出版された日本語論文集（『近代日本哲学と東アジア』）の中の一章で公にすることができた（「呼応性と意味の論理：山内得立と高山岩男の考察をてがかりに」）。また、国際的な英語論文集（The Dao Companion to Japanese Buddhist Philosophy）の中の一章として、近代日本の哲学のなかに見出される仏教的伝統をめぐる論考を担当した。これは論文集の性質上、表立って論理・数理に論及してはいないが、本研究によって得られた東アジア哲学に関する理解を背景とした成果となっている。

(3) 本研究ではまた、直接には東アジア哲学と関係しない副次的な成果が得られた。まず、上記のように第二次大戦後の分析哲学と大陸哲学の分断について考察する中で、二〇世紀大陸哲学の枠組みの見直しに着手した。二〇世紀の大陸哲学の中に分析哲学との交渉を探るという方向で研究を進め、意味理論をめぐってその成果の一部を論文として公刊した（「意味理論の別の可能性：ドゥルーズと可能世界意味論の交錯」）。同時に、近代哲学の関数論的理解の起源をたどることで、十七世紀哲学に潜在的に見られる関数論的な哲学理解について解明を進めた（「スピノザ・ヘーゲル関係再考：数理思想的観点から」）。

(4) 総じていえば、本研究「東アジア哲学の共通基盤としての数理と論理」は、西田幾多郎以来の京都学派および牟宗三を中心とした現代新儒家の哲学において数理と論理をめぐる思索が果たしてきた役割の重要性を明らかにすることに努めた。両学派の哲学は、宗教直観などではなくあくまで普遍的なものとしての数理や論理に依拠する性格をもつが、それこそが両学派を「哲学」たらしめているのである。つまり、西洋近代哲学の枠組みを引き継ぎつつそれを拡張する意図をもち、そのために一定程度において大乗仏教に依拠することを方法とする点に、「東アジア哲学」の共通性がある。本研究は、こうした理論的性格の明確化を推し進めたが、数理的・論理的な基盤がどのように意味の次元と関係しているかについては当初の見通しを超えた困難に突き当たり、この点の解明は今後の課題として残された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 朝倉友海、宋琦(訳)	４．巻 549
２．論文標題 東亞哲學的理念與牟宗三：本文的意圖 [2]	５．発行年 2021年
３．雑誌名 鵝湖月刊	６．最初と最後の頁 4-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 朝倉友海	４．巻 547
２．論文標題 東亞哲學的理念與牟宗三：本文的意圖 [1]	５．発行年 2021年
３．雑誌名 鵝湖月刊	６．最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 朝倉友海	４．巻 49(1)
２．論文標題 東アジア哲学とは何か、そして何であるべきか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 146-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 朝倉友海	４．巻 35
２．論文標題 東アジア哲学の理念と牟宗三	５．発行年 2020年
３．雑誌名 中国――社会と文化	６．最初と最後の頁 82-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 朝倉友海	4．巻 11(2)
2．論文標題 スピノザ・ヘーゲル関係再考 数理思想的観点から	5．発行年 2020年
3．雑誌名 京都ユダヤ思想	6．最初と最後の頁 4-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 朝倉友海	4．巻 70(1)
2．論文標題 意味理論の別の可能性：ドゥルーズと可能世界意味論の交錯	5．発行年 2019年
3．雑誌名 神戸外大論叢	6．最初と最後の頁 67-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Asakura Tomomi	4．巻 16
2．論文標題 Engaging Japanese Philosophy: A Short History By Thomas Kasulis. Honolulu: University of Hawai‘i Press, 2017. Pp. x + 773. ISBN 10: 0824874072; ISBN 13: 9780824874070.	5．発行年 2019年
3．雑誌名 International Journal of Asian Studies	6．最初と最後の頁 158-160
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1479591419000081	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Asakura Tomomi	4．巻 －
2．論文標題 Interaction Between Japanese Buddhism and Confucianism	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Dao Companion to Japanese Buddhist Philosophy	6．最初と最後の頁 205-234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1007/978-90-481-2924-9_7	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 ASAKURA Tomomi	4．巻 -
2．論文標題 Japanese Philosophy	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Oxford Bibliographies in Philosophy	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/obo/9780195396577-0370	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 朝倉友海	4．巻 2
2．論文標題 行為的自己の論理　牟宗三と西田幾多郎の比較を通して	5．発行年 2018年
3．雑誌名 国際禅研究	6．最初と最後の頁 7-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 朝倉友海	4．巻 68-2
2．論文標題 場所的論理の形成期における意味の問題	5．発行年 2018年
3．雑誌名 神戸外大論叢	6．最初と最後の頁 161-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 朝倉友海	4．巻 B71
2．論文標題 田辺元の複素関数論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 RIMS Kokyuroku Bessatsu（数理解析研究所講究録別冊）	6．最初と最後の頁 75-92
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　5件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 アジアの中の日本哲学
３．学会等名 連続シンポジウム「世界哲学・世界哲学史を再考する」
４．発表年 2021年

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 西田がいう論理とは何か
３．学会等名 哲学会　大会シンポジウム「世界哲学の中の西田幾多郎」（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 東アジア哲学の理念と牟宗三
３．学会等名 中国社会文化学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asakura Tomomi
２．発表標題 Nishida Kitaro and Mou Zongsan on the logical genesis
３．学会等名 International Society of East Asian Philosophy（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asakura Tomomi
２．発表標題 Will and action in Nishida's philosophy
３．学会等名 東亞倫理學：意志與行為
４．発表年 2019年

１．発表者名 Asakura Tomomi
２．発表標題 Nishida and Mou Zongsan on logical categories
３．学会等名 東亞視野下的邏輯
４．発表年 2019年

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 関数論と可能世界：歴史的観点から
３．学会等名 RIMS共同研究「数学史の研究」（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 従牟宗三天台学的観点看西田幾多郎的禅哲学
３．学会等名 Chan Zen Seon：禅的形成及其在世界的展開（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 スピノザ・ヘーゲル関係再考：数理思想的観点から
３．学会等名 京都ユダヤ思想学会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 場所・意味・出来事
３．学会等名 現象学の異境的展開（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 朝倉友海
２．発表標題 田辺元の複素函数論の射程
３．学会等名 RIMS共同研究「数学史の研究」（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 ASAKURA Tomomi
２．発表標題 Sense and event in the logic of place
３．学会等名 International Association of Japanese Philosophy（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計4件

1．著者名 伊藤邦武・山内志朗・中島隆博・納富信留（編）、朝倉友海［分担執筆］	4．発行年 2020年
2．出版社 筑摩書房	5．総ページ数 320
3．書名 世界哲学史８	

1．著者名 藤田正勝・林永強（編）、朝倉友海［分担執筆］	4．発行年 2019年
2．出版社 臺大出版中心	5．総ページ数 291
3．書名 近代日本哲学と東アジア	

1．著者名 渡辺誠・木田直人（編）、松永澄夫（監修）、朝倉友海［分担執筆］	4．発行年 2017年
2．出版社 中央公論新社	5．総ページ数 640
3．書名 哲学すること　松永澄夫への異議と答弁	

1．著者名 鍾振宇・陳威［王晋］（編）、朝倉友海［分担執筆］	4．発行年 2017年
2．出版社 中央研究院	5．総ページ数 306
3．書名 東亞哲學的終極真理	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
中華民国	国立政治大学	国立台湾大学		
中国	武漢大学			